

「国会事故調の意義を日本人はわかっていない」—委員長・黒川清さんのロングインタビュー(上)

2013年03月12日 原発、地震・災害

今回から3回連続で、東京電力福島第一原発の国会事故調査委員会で委員長を務めた黒川清・元日本学術会議会長のインタビュー記事をお届けする。黒川さんは「原発事故の原因究明に向けた調査に使命感をもって臨んだ」などとして、米科学振興協会(AAAS)の「科学の自由と責任賞」に選ばれ、2月に米ボストンで賞を授与された。国会事故調の仕事を、世界の科学界は高く評価したのである。「それなのに日本の反応は・・・」と黒川さんは嘆く。国会事故調はほかの事故調とどこが違うのか、その意義が理解されていないというのだ。黒川さんの思いの丈をお伝えする。



黒川清さん＝政策研究大学院大学の研究室で

—受賞おめでとうございます。

黒川 ありがとうございます。

—米ボストンでの授賞式はいかがでしたか？

黒川 旧知の人に大勢会ったけど、皆、国会事故調の報告書を「すごくいいレポートだ」って言ってくれましたね。これだけのことははっきり言うっていうのはなかなか大変だろうって。2年前の福島原発事故のときは、世界が注視する中で日本の信頼がなくなったと思った。世界で第3位の経済大国で、しかも科学技術とエンジニアが非常に強いついていう評判の日本で、あの大きな災害とはいえ原発事故が起こった。みんなびっくりしたわけです。しかも今は、テレビでもネットでもみんな見られるでしょ。記者会見を見てたら、なんかはっきり言わない、なにか隠している、と。だからもう1週間で信用なくなっちゃったね、たぶん。

—国会事故調の報告書が英語で発信されたことで、失墜した日本の信用が回復できたんでしょうか。

黒川 いや、それはそうじゃないけどね。ただ、国会事故調はほかの事故調とは違うっていうことを、特に欧米の識者はわかっていたと思う。日本人は、考え方の基本的なものがわかってない

と私は思ったわけ。だって、東電事故調、畑村（洋太郎）さんの政府事故調、船橋（洋一）さんの民間事故調、そして国会事故調の4つを並べて比較しているんだから。東電にしる政府にしる、自己点検するのは当たり前でしょ。政府事故調のスタッフのほとんどは役所の人です。後で聞くと、各省から4人ぐらいいる。「いや、あれはもう楽勝でしたよ」って言っていた。何を書かれるか役所の連中はわかっているんだから。「だけど国会事故調はみんな緊張してましたよ。いつ出てこいって言われるかわかんなかった」って。全然違うわけ。ぼくは最初から、こういう時は独立した国際的なタスクフォース（調査委員会）を作らないとだめだと言っていた。国会事故調は、委員会をすべて公開してやった。それでいろんな人がたくさん本を書いた。朝日新聞も「プロメテウスの罠」という非常にいい連載をやった。ああいうのは、ある意味でみんな民間事故調なんだよ。いろんな報告が出てくるのはいいことです。

——国会事故調は、「東京電力福島原子力発電所事故調査委員会法」という法律を特別に作って、半年限りということで活動しました。こうした調査委員会を国会が設置するのは憲政史上初めてのことでした。

黒川 それ自身が異常なんだよ。イギリスの外務省の人に「え、初めてなんて信じられない」って言われた。イギリスは毎年2、3本やっている、と。大事な時はそういうことをやるのがデモクラシーの基本だっただけでわかっているから。日本の国会議員にもこの委員会の意味を認識している人もいます。委員会に国会議員がいないのはおかしいと言った人もいた。ものによっては議員が入っていてもいいんだけど、少なくとも役所の審議会と違うんだ。審議会のシナリオを書いているのは役所だから。役所を監視するのが立法府の役目でしょ。これは立法府の機能強化なんだよ。民主主義制度は、イギリス、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、日本ってみんな違うけど、少なくともある程度の歴史を経ながら、機能させるように作っている。そのプロセスの一つがこれだととらえているわけ。だから、法律が成立したときには「初めて立法府が機能したのね」って私はコメントしたんです。（続く）

高橋真理子（たかはし・まりこ）

朝日新聞編集委員。1979年朝日新聞入社、「科学朝日」編集部員や論説委員（科学技術、医療担当）、科学部次長、科学エディターなどを務める。著書に『最新 子宮頸がん予防——ワクチンと検診の正しい受け方』、共著書に『独創技術たちの苦闘』『生かされなかった教訓—巨大地震が原発を襲った』など、訳書に『ノーベル賞を獲った男』（共訳）、『量子力学の基本原理解 なぜ常識と相容れないのか』。